

2020年4月1日

距離感

公益財団法人 国際通貨研究所
理事長 渡辺博史

新型コロナウイルスの感染激化により、社会の動き、そして経済活動が大きく損なわれている。感染者の治療に尽力するというのではなく、予防の段階に力点をおけばおおよそ接触可能性を引き下げるためにヒトの動きが抑制、規制されるだけでなく、段ボールの表面でも72時間生息するという判定を受けて、モノの動きまでも大きく制限されるようになっている。

発生因について、米中のやや「醜い」というか「見難い」やりとりが生じているが、それは別に置くとしても、発症、感染について、いくつかの顕著な地域的差異が生じている。人種ごとに免疫度の差があるといった説もあるが、これはやや差別的な議論を招きかねない。そこで、この線には踏み込まないようにしたいが、習俗面での特性からくる差異はありうるのではないか。

第一に、この新型コロナウイルスが、空気感染ではなく、飛沫などを介した伝染をするとなると「ヒト」と「ヒト」との「距離」の長短にはそれなりの意味はありそうである。今、ヨーロッパで最大の被害地域になっているイタリアを見ると、人間同士の距離は密着ともいえるべき近さである。握手のみならず、ハグ（抱擁）が日常的に存在している国では、距離を置かねばならないと意識はしたとしてもその実行は難しい。最近、某国の大臣が「こういう状況に鑑み、握手はしばらく自粛しよう」と壇上で言った直後に、次の登壇者と握手をしてしまったという映像が流れていたが、身についた習俗を止め、グータッチ、肘タッチ、そして目礼にと、それなりの距離を置いていくのには時間がかかるだろう。イタリアと中国の感染者数、犠牲者数の絶対値は（公表数字を信頼すれば）ほぼ同数であるが、人口で22倍の差があることから見れば、イタリアの数字は極めて高い。こちら側を見ると、人間同士の日常の距離感の差が影響しているという感じは否めない。

デズモンド・モリスが著した「裸のサル – 動物学的人間像 (The Naked Ape)」は、文化圏、地域毎に「快く感じる距離に差がある」と分析している。日本の頭を下げる挨拶、タイのように互いに自らの両手を合わせて行う目礼を典型として、ユーラシア大陸の東部では快適と感じる距離が比較的長い。それに対して、ユーラシア大陸の中部・西部では、握手、ハグ（抱擁）あるいはキス（接吻、頬すり）が主流であり、そして現在

の南北アメリカ大陸にはこの習俗が持ち込まれている。

昔、ソ連を訪問した帰途に訪問して来た米国高官を出迎えた某国の老年女性政治家が歓迎の類すりをしながら「私のようなおばあちゃんとも、ロシアの男性とするより良いでしょ」と言ったという話が流れたことがあるが、こういった日常行動は、いわば「自然な」行動としてしっかり身につけているし、下手をするとこういう行動を止めると相手を忌避したように見えると懸念することもある、変化させるのは難しい。しかし、しばらくの間、距離を置く習練をしてもらおうだろう。

第二に、口を介して飛沫などから感染するという点からは、発音慣習の差も影響を与えるのではないかと、とも言われる。シラバスの多い単語を用い、かつ、吸い込みよりも噴き出しが多い発声法を用いる言語では、唇を通して、外に出る呼気の空気量が多くなるためにウイルスを含むかも知れない飛沫量が増えるのではないかとということである。これも、まだ実証的な証拠はないが、あえて言えば、日本の東北地方の感染率が相対的にかなり低いという事実には、この点で注目してよいのかもしれない。

経済的にも大きな災禍になりそうでありそれについても十分な対応を考えていく必要があるが、疫学、公衆衛生の面でもスペイン風邪以来の惨事になりかねない状況に対し、それぞれ自分でできることをキッチリと行いながら、乗り越えていきたいものである。

(以上)

(IIMA メールマガジンへの寄稿)

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべて御客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2020 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: Nihon Life Nihonbashi Bldg., 8F 2-13-12, Nihonbashi, Chuo-ku, Tokyo 103-0027, Japan

Telephone: 81-3-3510-0882, Facsimile: 81-3-3273-8051

〒103-0027 東京都中央区日本橋本 2-13-12 日本生命日本橋ビル 8 階

電話 : 03-3510-0882 (代) ファックス : 03-3273-8051

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>